

皮膚爬行症様症状を呈した肺吸虫皮膚異所寄生の一例

宮里 昂 安藤 収介 中川 修

山口県立医科大学病理学教室 (指導 細川修治教授)

(昭和35年9月5日受領)

肺吸虫は本来の寄生部位である肺以外に、異所寄生を営む事が特徴である。此の異所寄生は容易に診断出来るものではなく、手術後に材料の検索の結果、疾病の原因が全く予期しなかつた肺吸虫の異所寄生と診断される事が多い。更に組織学的検索の結果、肺吸虫に因るものとの疑いは濃厚であつても、虫体或は定型的な虫卵が証明されず、肺吸虫異所寄生と決定出来ない場合もある。

山口県下の肺吸虫症患者は、我が教室の調査の結果、各河川流域、特にその山間地帯で地方病的様相で発生して居る。これは、山間地帯の蛋白資源の一つとして、「ツガニ」の嗜食が盛んな事が原因である。尚、県下の各河川産の「ツガニ」には、相当高率に肺吸虫被囊幼虫が寄生して居る事は、我が教室の内野、高橋、豊原の調査で明かにされて居る。

此の様な環境の為、肺吸虫の異所寄生例に遭遇する機会があり、既に当教室では細川ら(卵管寄生)、安村ら(大綱寄生)、本学第2外科の森岡(脳寄生)の報告が見受けられる。

我が教室に病理組織診断を依頼された症例の中に、肺吸虫に因り、皮下組織及び肝の好酸球浸潤が認められた例で然も皮膚に長江浮腫様の症状の認められた1例を経験したので報告する。

観察症例

山口日赤病院外科、政井健次博士依頼

11歳男、主訴、右季肋部の腫脹

何等誘因と思われるものなく、右季肋部に腫脹を生じた。しかし、此の部分は軽度の圧痛がある以外、全身状態は異常はない。

既往歴及び生活歴：時々腹痛を訴える以外は、健康で著患を知らない。患者は県下の佐波川上流に居住し、魚釣を好んだ。しかし、捕獲した魚を嗜食した事はあまりなく、河蟹を食べた記憶も明確でない(問診しても要領を得ない)。

検査成績

白血球数10200、白血球百分率、好中球47%、リンパ球31.5%、好酸球17.5%、単球4%で好酸球増多症がある。赤沈値は1時間25、2時間66で若干促進して居る。肺、胃、胆嚢のX線検査で異常所見は認めない。肝機能検査を行つても肝障害は証明されない。

局所所見：右季肋部から胸部に浮腫状腫脹があり、軽度の圧痛があるが、皮膚の発赤及び色素沈着はない。肝は2横指触知されるが、特に硬いと云うことはない。

入院後の経過

上述の所見及び検査から一応肝腫瘍の疑いで試験開腹を行つた。浮腫状の皮下組織に著変なく、腹水もない。肝表面は平滑であるが、処々に小指頭大の白色の部分が散見された。大綱及び腸間膜リンパ腺が数コ腫大して居る以外は腹部各臓器に著変はない。前記肝の白色の部分を組織学的検査の為試験切除し、手術創を閉じた。術後順調に経過したが、7日目に手術創に近く、以前の皮膚と異なる部位に拇指頭大の皮膚膨隆が2コ生じた。前回と同様、軽度の圧痛以外に異常所見はない。然し特異な点は此の膨隆は時間的消長があり、移動が認められた。翌日、局所を切開すると、皮下組織は壊死状で汚穢色を呈して居るが、膿様物の流出はない。詳細にみると、この中に異物様のものがあつたので、周囲組織と共に切除した。2カ所に切開を行つたが、異物は1カ所のみであつた。此の異物は米粒大、赤褐色、無花果形(2×3.5mm)の虫体で、伸縮運動を行つて居た。其後は順調に経過し開腹術後、18日で退院した。

発見された虫体は、腹面に2コの吸盤、即ち、口吸盤及び腹吸盤が認められた。卵巣内の卵形成は認めない。卵巣、皮棘の状態から此の虫体はウエステルマン肺吸虫である。

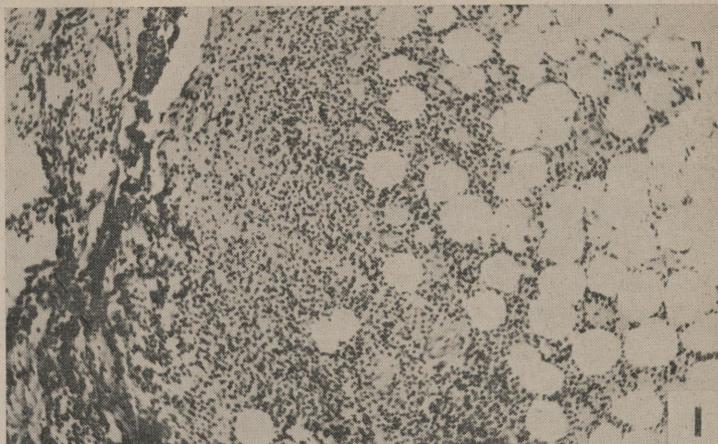
皮下組織及び肝の組織学的所見

皮下組織は、組織の軽度の壊死と無数の好酸球からな

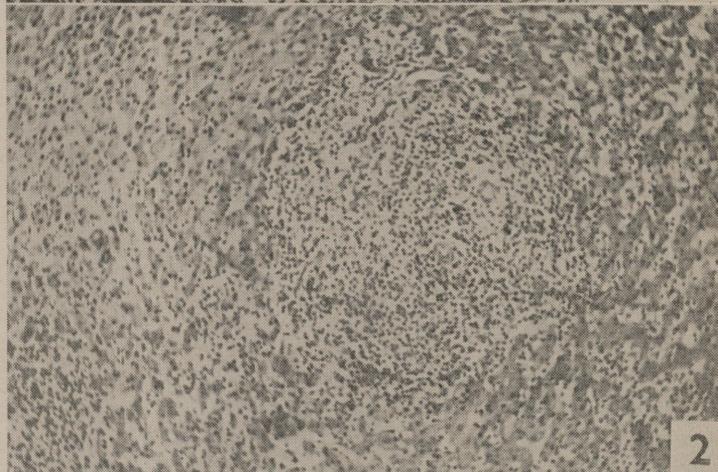
本研究は文部省科学研究費(肺吸虫班)の補助を受けた。

写真説明

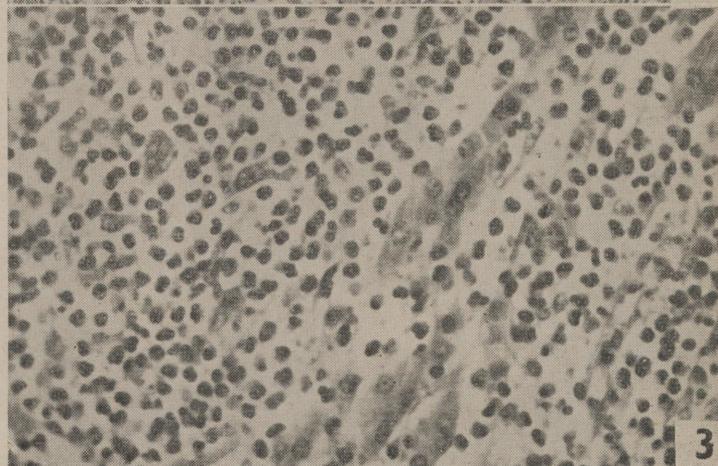
1. 皮下組織内の細胞浸潤を示す、細胞の殆んどが好酸球である



2. 肝組織内の細胞浸潤を示す、浸潤巣の中心部は肝細胞が消失して居る



3. 2. の強拡大、殆んどが好酸球であるが、少数の大単核球が認められる



る浸潤細胞集団があり、処によつては線維素の析出がみられる。しかし、好酸球以外の浸潤細胞は殆んどみられない。隣接脂肪織及び結合織間隙には播種状ないしは散在性に好酸球の浸潤があり、細血管の充盈を認める。

肝の変化も、皮下組織と同様に主な変化は、好酸球の浸潤である。即ち小葉内或は小葉間に多数の好酸球が集塊を為して居り、この集塊には少数の大単核球が混つて居る。此の部の肝細胞は壊死に陥り、病巣隣接の肝細胞索は細長くなつて居る。Sinusoid には、好酸球が充満して居る、遠隔部の Sinusoid にも好酸球がみられる。

両組織共に未だ肉芽組織の形成はない。

考 按

此の症例の発生機転は、肺吸虫被囊幼虫が宿主に経口的に摂取されて肺に至る迄の体内移行を考えれば自ら理解出来る。そこで、実験的犬肺吸虫症に於ける肺吸虫の宿主内移行状態を述べながら、此の症例の発生機転を説明したいと思う。

宿主の小腸に達した被囊幼虫は脱囊して後、腸管を穿通し腹腔内に入る。その後、大多数は上行して横隔膜を穿通し胸腔に入り、肋膜を穿通し肋膜下の肺組織に虫嚢を形成するが、少数は横隔膜穿通に先立つて、横隔膜直下に位置して居る肝をも穿通する。又、或るものは腹壁腹膜直下或は筋組織内に穿掘しつつ移動する。此の様な状態は、犬に被囊幼虫を感染させた後、1~2週間で開腹すると観察される。本症例は、虫体の大きさ、組織像、病変の位置が皮下及び肝に認められた点から、前述の実験的犬肺吸虫症の感染後1~2週間に一致するものである。

肝の病変と皮下の病変が、同一虫体に因るものか、別個の虫体に因るかは、簡単に決定し兼ねる。しかし、肝の組織像は、好酸球に大単核球が混じて居る点から皮下の病変より僅かながら旧い様に考える。此の事から、肝を穿通して後、腹壁内に迷入し、皮下を移行した為皮膚に浮腫状腫脹と疼痛をまして、丁度爬行症の如き症状を呈し、第1回手術時の皮膚では発見されず更に移動したものと考えられる。流行地では皮膚の移動性腫脹に就て、顎口虫を疑い検査すると同時に肺吸虫の皮膚異所寄生も疑い検査することも忘れてはならないと思う。

既に述べた様に、感染後間もない時期の病変も考えられるに拘らず、“ツガニ”の捕食の記憶がないと云う事は不思議であるが、これは、患者が、蟹が料理されているのを(例えばすりつぶしてダンゴ、或は蟹汁)知らない

で食べたか、或は、蟹同志の闘争により離断した脚、或は死んだ蟹から遊離した被囊幼虫が河水の使用に因り(例えば、水泳、飲用、食器洗滌)誤つて感染したものと推察される。

結 論

11歳男、右季肋部の浮腫状腫脹を呈し、爬行症様皮膚腫脹を認め、試験開腹の結果、皮下組織及び肝に病変を認めた。又皮下組織には虫体を認めた。検索の結果、虫体はウエステルマン肺吸虫であつた。

病変部の組織像は、無数の好酸球の浸潤を示した。

此の病変の発生機転を実験的肺吸虫症と対比して考察した。

本論文の要旨は日本寄生虫学会、第14回西部支部大会に於いて発表した。

参 考 文 献

- 1) 細川修治・竹内清海・森田健規知(1957): 肺吸虫の卵管壁異所寄生例, 寄生虫学雑誌, 6: 182-184.
- 2) 高橋一郎(1956): 山口県産「ツガニ」の肺吸虫被囊幼虫の寄生状況に就て(第2回報告), 寄生虫学雑誌, 5, 18-21.
- 3) 高橋一郎(1956): 山口県産「ツガニ」の肺吸虫被囊幼虫の寄生状況に就て(第3回報告), 寄生虫学雑誌, 5, 22-25.
- 4) 高橋一郎(1956): 山口県産「ツガニ」の肺吸虫被囊幼虫の寄生状況に就て(第4回報告), 寄生虫学雑誌, 5, 321-324.
- 5) 高橋一郎(1956): 山口県産「ツガニ」の肺吸虫被囊幼虫の寄生状況に就て(第5回報告), 寄生虫学雑誌, 5, 325-328.
- 6) 高橋一郎(1957): 山口県産「ツガニ」の肺吸虫被囊幼虫の寄生状況に就て(第6回報告), 寄生虫学雑誌, 6, 568-572.
- 7) 高橋一郎(1957): 山口県産「ツガニ」の肺吸虫被囊幼虫の寄生状況に就て(第7回報告), 寄生虫学雑誌, 6, 573-576.
- 8) 森岡久(1955): 脳内肺チストマ症の一例, 山口臨床医学, 3, 131-134.
- 9) 豊原守(1960): 山口県産「ツガニ」の肺吸虫被囊幼虫の寄生状況に就いて(第8回報告), 山口医学, 9, 317-319.
- 10) 内野文彌(1954): 山口県産「ツガニ」の肺吸虫被囊幼虫の寄生状況に就て(第1回報告), 寄生虫学雑誌, 3, 255-257.
- 11) 安村寿嘉・河本博(1959): 肺吸虫の大網異所寄生の一例, 山口医学, 8, 319-325.

ONE CASE OF DERMAL HETEROTOPIC PARAGONIMUS PARASITISM WHICH INDUCED CREEPING DISEASE-LIKE SYMPTOMS

TAKASHI MIYAZATO, SHUSUKE ANDO & OSAMU NAKAGAWA

(Department of Pathology, Yamaguchi Medical School, Japan)

A patient, 11-year-old boy, complained dermal edematous swelling of right hypogastric region which showed creeping disease like dermal swelling.

Paragonimus westermanii parasitism and eosinophile leucocytes infiltration in the dermis and subcutaneous tissue was recognized by means of probe laparotomy, furthermore, eosinophile leucocytes infiltration in the liver parenchyma, too.

寄贈文献目録 (18)

663. 松田鎮雄(1960)：原爆14年広島市保育園児の寄生虫の実態(原爆と寄生虫II)，広島医学，13(9)，862～870。
664. 松田鎮雄(1960)：肛囲検査法の研究，XIV ウスイ式セロファン法，広島医学，13(8)，785～787。
665. 上田晋・上井輝雄・オルソン・ジョージ・松田鎮雄(1960)：西条保健所管内における寄生虫淫浸率について(Ⅲ)，広島医学，13(11～12)，1032～1044。
666. 武田勝美(1957)：鉤虫仔虫の抵抗性に関する実験的研究，第1編，有機燐農薬に対する鉤虫仔虫の抵抗性について，岡山医誌，69(9)，2291～2307。
667. 武田勝美(1957)：鉤虫仔虫の抵抗性に関する実験的研究，第2編，自律神経麻痺並に遮断剤及び同剤添加 Parathion 液の鉤虫仔虫に及ぼす影響について，岡山医誌，69(9)，2309～2319。
668. 武田勝美(1957)：鉤虫仔虫の抵抗性に関する実験的研究，第3編，鉤虫仔虫の人工胃液等に対する抵抗性について，岡山医誌，69(9)，2321～2332。
669. 武田勝美(1957)：鉤虫仔虫の抵抗性に関する実験的研究，第4編，鉤虫仔虫の胃液に対する抵抗性について，岡山医誌，69(9)，2333～2344。
670. 関剛・大鶴正満(1960)：福島県における肺吸虫症の1流行地について，寄生虫誌，9(3)，309～313。
671. 櫛純一・板谷啓司・関剛(1960)：肺吸虫寄生学童の集団治療成績について，胸部疾患，4(3)，204～212。
672. 木村隆二・宮田義雄・小出一平・増田昭一・渡辺宏(1960)：新潟県における肺吸虫症の一新流行地について，新潟医誌，74(2)，212～215。
673. 中川晃子(1960)：モクズガニの生態と肺吸虫メタセルカリアの寄生状況について，新潟医誌，74(6)，861～881。
674. 三条英一(1960)：東洋毛様線虫の集団駆虫について，新潟医誌，74(10)，1342～1358。
675. 篠原正道(1960)：鉤虫寄生者の臨床的研究特に血液所見を中心としたズビニ鉤虫とアメリカ鉤虫との比較，新潟医誌，74(2)，158～174。
676. 増田昭一(1960)：保存血内におけるマラリア原虫の感染性に関する研究，新潟医誌，74(2)，180～197。
677. 堀田猛雄(1960)：幼稚園，小学校及女子高校における蟯虫感染状況と駆虫について，臨床消化器病学，8(9)，647～657。
678. 堀田猛雄・三条英一・高山照三・大関孝司・中山俊郎(1960)：新潟市就学予定児童(昭和35年度)の蟯虫卵検査成績について，新潟医誌，8(10)，713～716。